九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

梵詩メーガ・ヅータ散文譯（承々前）

小野島，行忍

https://doi.org/10.15017/2556569

出版情報：文學研究. 31, pp.79-95, 1942-06-30. 九州文學會
バージョン：
権利関係：

梵詩メーガ・ヅータ散文譯（承々前）

小野島行忍

雲のつかひ

八一

「かしこ、俱鞞羅[1]の御殿の北にわれらの家は、因陀羅[2]の眞弓かとばかり美しき迫りもち戸口もて、遙かよりこそ見ゆれ。そのはし近く、わが妻に養ひ子として育まれ手のとどく花聚もてしだれし、若木の曼陀羅樹[3]あり。

（1）アラカーに。

（2）スラ・パチは「神の主」の意にしてインドラ神の異名なり。インドラは雨神にして「インドラの弓」とは虹なり。

八二

「そこには、つやゝかなる瑠璃の莖もてる金色のひらきし蓮華におほはれ綠玉の石もて階道（つくられし）池もあり。その水にすみて愁ひ去りし鶴は、汝を見てもほど近きマーナサを憬れざるべし。

（1）　我が家には。

（2）　雲來りてたとへ雨降るとも其のよき池の濁る愁ひ無しとての意なり。

八三

「その堤に、まぐはしき碧玉もて頂なされ金色の甘蕉の生籬うつくしき遊樂山あり。友よ、けぢかく雷光ひらめく汝を見ては我れそれをぞ想ふ、わが妻の愛づるものとて心もときめきて。

（1）　我が家の池の。

（2）　その遊樂山を聯想す。

八四

「そこに、千日紅の垣ゆへる春華のあづまや近く、芽ざし搖げるあけの無憂樹と美しき醉花とあり。渴仰にことよせて我れのむた、一は汝の朋女のやさしき足に憬れ他はその口の美酒を希へり。

（1）　我が家の遊樂山に。

（2）　マーダビーは「春の花」の意にして學名 Gaertnera racemosa といふ蔓草なり。

（3）　無憂樹（ア・ショーカ）は學名 Jonesia asoka roxb と云ふマメ科の木にして其の花は大きくして赤し。

（4）　醉花（ケーサラ別名バクラ）は學名 Mimusops elengi といふ木なり。

（5）　樹木はそれ〴〵異りたる渴仰（ドーハグ）をもち其れをかなへて後に花を咲かすものなりと詩想せらる。而して無憂樹は女の足にて蹴らるゝ渴仰をかなへて花を咲かせ、醉花は女の口づから酒をふきかけらるゝ渴仰をかなへて花を咲かすと云はる。

（6）　無憂樹は。

（7）　雲の朋女すなはち藥叉の妻。

（8）　醉花は。

八五

「またその[1]（樹）間に、若竹のごとく輝ける玉[2]を柢にちりばめ水晶の臺に立てる金の棲木[3]あり。腕環さやぎて微妙しき手拍子もてわが妻に舞はしめられし、汝らの友[3]なる孔雀は夕されば其れにとまる。

（1）　無憂樹と醉花との。

（2）　綠玉なり。

（3）　雨期になるや孔雀はみごもりて欣ぶ。故に孔雀を雨を降らす雲らの友と云ひたるなり。

八六

「淑人よ、心にとめられし此れらの目星により、また扉の（双）方に姿をがゝれし勝伽・波曇の二天をみて、げに今やわれ居ぬゆゑに光かすけき（わが）家を汝見しるべし。むべ、眞日しづむや蓮はその麗しさをとゞめず。

（1）雲によびかけて云ふ。

（2）勝伽（シャンカ）及び波曇（パドマ）はそれ〳〵財寶の神クベーラの九寶の一つなり。此れらはクベーラ神の隷人として人格化され崇拜の對象となれり。

（3）主人を日に、その家を蓮に比す。

八七

「疾き天降りのため頓に象兒の小形をとりて、さきに語りし頂うつくしき遊樂山にいこひし汝は、光いと仄かにして螢の列きらめくかと見ゆる、いなづまの閃きのまなざしを家内になげ入るゝを欣ぶ（ならむ）。

八八

「かぼそく世ごもり、尖り齒やいろづきしビンバ（七四2）の唇さてはをのゝける牝鹿の目をもち、肚邊ほそく臍ふかく、（双）奶もてやゝ撓み、脛重ゆゑに歩みしづけく、若女のなかにて造化のこよなき御作かとばかりなる彼の女ぞかし（1）

こに居らむ。

（1）　我が家の内に。

八九

「連理のわれ天離(あまさか)れるや雌鴛鴦(チャクラ・ヴーキー)(1)にも似てひとり淋しく言葉なき彼の女(ひと)を、わが二(2)の命(いのち)と汝しるべし。あこがれ切なる（その）若女(わかきめ)の、つらき此の日頃ふるまゝに、寒(シシラ)(3)にいためられし蓮華のごとく玉容(さま)かはりしを我れ想へり。

（1）　チャクラ・ヴーキーはチャクラ・ヴーカ（學名Anas casarca）の雌なり。この鳥のつがひは易らざる夫婦の情の典型とせらる。此の鳥は或る聖者を怒らせしため永く夜は雌雄悲しく別れて居らねばならぬと云はる。

（2）　我が第二の生命すなはち「最愛の妻」と。

（3）　シシラ（寒季）は印度の年中六季（春・夏・雨・秋・冬・寒）の一にして、十一月十六日より翌年の一月十五日までなり。玆にシシラを「白霜」とよむも亦可なり。

九〇

「泣き頻(しき)りて目も腫(は)れ吐息のほてりに唇いろあせ、手に凭(もた)れ髪端(かみはし)に(1)なかば見えぬかの愛女(いとしめ)の顔ばせは、汝のまつはりに光華(かがやき)そこなはれし月のいたましき姿(さま)をまさにおぶ。

（1）　髪のほつれかゝりし女の顔を、雲になかば隱れし月に比す。

九一

「わが妻は、禮拜にいそしみまたは思ひ知らるゝわが別れに寞れし俤を繪にかき、はた鳴く音やさしき籠なるサーリカー[1]に『優雅しき子よ、そなた御主を思ひいでゝよ、そなたは其の籠女なれば』と言とひ、

（1）　サーリカーは學名 Turdus salica といふ鳥なり。

九二

「また和人[1]よ、衣も褻[2]れし小ひざに笠篌[3]おきて我が名しるく詞なされし歌たかやかに唄はむとおもひ、泪にぬれし絃をからくも彈じて躬らものせし律呂なるを屢わすれ、

（1）　雲によびかけて云ふ。

（2）　夫が旅にある妻は化粧せず、きれいなる衣は着ざるなり。

（3）　ビーナーはギターの如き樂器なり。これを七絃の笠篌に似たるものと見て假りに其の字を當てたり。

九三

「はた別れの日より定まれる限りの殘んの月（かず）を、高閾に置かれし花にかぞへて床におとし、または所作しのばるゝ我れとの逢ひごとを思ひ樂しみつゝ、汝の目路にとみに入らむ。およそ此れ[1]など夫と離れての麗女のすさびにこそ。

（1）　上述の事々が。

九四

「晝にはひまなき汝の朋女[1]をわが別れはさまで傷ましめざらめど、夜はなぐさみ無くしてその歎きいや增せるを我れは懼る。[2]されば眞よなか、眠りもやらで地を臥所とせる彼の貞女を、わが消息もてまたく悅ばさむため、汝（その）家の窓に立ちて見よ。

（1）　雲の朋女すなはち藥叉の妻。

（2）　異本による。

九五

「（かつては）我れのむた思ふがまゝの好きごとに刹那の如くすごされ（いまは）別れゆゑに時長くされしその夜を、あつき泪にあかしつゝ惱みにやつれ離居るとこに片臥し、東の天垠にわづか一虧[1]のこれる月の輪めける、

（1）　カラー（ひとかけ）は月の直徑の十六分の一を云ふ。

九六

「または櫺子窓の隙にさし入りし月の甘露[1]もて冷き光へと、さきの好情より向けてほどなく返せし目を、悲しさに泪おもたき睫もてかくしつゝ、曇り日に開きもやらず閉ぢもせぬ芙蓉のごとき、

（1）　月には不死の甘露ありと云はる。

九七

「はた洗ひしのみ[1]なれば滑らかならで、さだかに頰に垂れかゝれる髪を、芽にまがへる唇なやませる吐息[2]もて放りつゝ、夢になりとも我れとの逢ひごとは如何にして成るべきかと、泪のたぎちに機障へられし眠りを慕へる、

（1）　夫が旅にある妻は髪油などの化粧料は用ひざるなり。

（2）　吐息の熱にて。

九八

「または別れの日のはじめに華鬘とりて結ひあげられ、呪ひのはつるや憂きふし消えし我れにとかる可きそのふれ心佗しくこはく粗きひとへ組髪を、爪[1]きらざる手もて頰のあたりゆ屢かいやれる（かの貞女を見よ）。

（1）　夫が旅にある妻は身だしなみをつとめてせざるなり。

九九

「かざりを撤て、やるせなき悲しさにたび〳〵床のなかに置かれし婀娜なる身をもてる彼の娵女は、汝にさへも新水より成れる泪をまさに滴らせむ。およそ心優しき者なべて思ひやる情あり。

一〇〇

「われになさけ篤き汝の朋女の心を知れり。されば甫めて別るゝやかの女はかく成りしとこそ思はるれ。已惚れのきもちは我れを夢にも思ひあがらせず。はらからよ、わが云ひし凡てはやがて汝のまのあたりに（あらむ）。

（1）　雲の朋女すなはち藥叉の妻。

（2）　雲によびかけて云ふ。

一〇一

「背のゆらぎ髪に障へられ睫黛のうるほひ失せまた酒うとめれば眉のこび忘れ、汝いたるや上つ方をのゝける鹿眸女の目は、魚の躍りにゆるゝ青蓮の美しさにも似つかむとぞ我れおもふ。

一〇二

「また、わが爪あと失せながく昵ひし眞珠の羅網を寓命(一)わりなく撤てさせられ、逢ひごとのはて我が手のかい撫でになれし、津けき甘蕉の莖かとばかり麗しきこの女のひだりの股は顫(二)くにいたらむ。

（1）　夫と別離するに至りし運命をいふ。夫の留守に妻は裝飾をつけざるなり。

（2）　女の左の股のわなゝくは吉兆とせらる。之れに依りて見れば前の句（一〇一）に云へる女の目の上部がをのゝくも亦吉兆なる可し。

一〇三

「雲よ、(一)そのとき彼の女もしも眠りえて怡悅しくあれば、汝これに侍り雷鳴をやめてただ三時刻(二)まで。夫なる我れをからくも夢に見てあるや、其のかたき手抱を頸よりきと拔けおちし蔓草めく腕の（むなしき）(三)むすびとな爲そ。

（1）　雲が藥叉の家の窓に立ちて見たる時に。

（2）　上流の女（パドミニー）は夜は三時間だけ眠るなり。

（3）　夢の中の抱擁が目ざまされて空しき拱手となるを云ふ。

一〇四

「なんぢの雫にて涼しきそよ風もて彼の女をさまし、爾ゐる丸窓に素馨のいと瑞々しき芽のむた爽だちて目を見すゑし（その）矜女に、いなづま含み(一)て自若たる汝はいかづちの詞もて言とひそむ可し。

（1）　おもてに顯はさずして身うちに隱せるを云ふ。

一〇五

『主おはす女よ、我れは（おんみの）夫のしたしき友にして、その消息をこゝろに留めておんみにと來りし雲なるを知りたまへ。たをやめの組髪[1]とかんと思ひあこがれ途につかれし旅人のむれを、こゝちよき底鳴りのいかづちもて促すその（くも）なるを』

（1）　九八參照。

一〇六

「かく言はるゝや彼の女は、マイチリーが[1]パヴナ・タナヤ[2]に（なしゝ）が如く、懷しさに心さわぎ顏あげて汝を見かつ禮び[3]てのち、こゝろして耳をかたむけむ。和人よ[4]、妻には友よりうけし夫の音信は逢ふに劣ること露ほどなるぞ。

（1）　マイチリーはビデーハ國の首都ミチラーの王ジャナカの姫シーターの異名なり。この姫はラーマ王の后となれり。

（2）　パヴナ・タナヤは「風の子」の意にして風神の子なる猿王ハヌーマンの異名なり。ハヌーマンはラーマ王の命をうけてランカー（いまのセイロン島）に空を翔りて渡りそこのラーヴナ鬼にさらは

れて居たるシーターを捜しあてゝ對面し其のおもむきをラーマ王に復命したり。

（3）異本による。

（4）雲によびかけて云ふ。

一〇七

「延命人よ、[1]わが求めにより且つは自らのために、汝かの女にかく言とふべし。『たをやめよ、たち別れ羅摩山の[4]仙居に逗りて生き長らふる、そなたの优儷はそなた恙なきかを訊ぬ。ともすれば不幸にしづむ有情によりて、まづいひ出でらるゝは之れにこそ。

（1）雲によびかけて云ふ。

一〇八

『遠かたに住み逆境に路さへられし（そなたの夫は）、痩せていらなく焦れなみだぐみ憂はしく呵噓いとふかき躬にて、（そなたの）いと細りなやまされて袖しぐれ不斷うらがなしく吐息もあつき玉身に、かの（ひとに知られぬ）[1]ねがひをもて交はる。[2]

（1）マッリナータの註によりて補ふ。

（2）主として肉感的享樂のねがひなり。

一〇九

『（かつて）朋女だちのまへにて、聲だかに言ひてよき事[1]をしも（そなたの）顏にふれたさに其の耳もとに囁かんと希ひてこそありしが、（いまは）みゝに聞かれず目にも見られぬその人が、焦れてことば成しゝ此の（たより）をそなたにと我がくちづてに云ふ。

（1）第一行の te の代りに tad とある異本による。

一一〇

「われは（そなたの）玉身をつる草に、眸光ををのゝける牝鹿の目もとに、顏ばせの美しさを月に、髮を孔雀の羽ぶさに、また眉のこびをいと細かき川波に想ふ。あゝ（されど）恚女よ、そなたに竝ぶものとては（その）いづれにも無し。

一一一

「こひに苛かされしそなたを丹靑もて石にかき、その足もとにひれ伏せる我れをゑがゝんとするや、不斷たゝへらるゝ泪にわが目は曇らさる。つれなき寓命はそれ[1]にてさへ、われとそなたの連理をゆるさず。

（1）其の繪に於てさへ。

一一二

「夢まぼろしに辛くも我れ得しそなたを緊といだくため、かひな空にさし出だしゝわれを見まもれる森の神の、眞珠のごとく大いなる泪の雫ぞ木々の芽さはに落ちざらめやは。

（1）露や樹脂は森の神の涙と見らる。

（2）涙が地に落つるは凶兆とす。ゆゑに木々の芽に落つと云へり。

一一三

「松が芽の褶をとみに綻ばせてその脂の流れに香ばしく、南へと吹く雪山のそよ風は、淑女よ、これぞ已にそなたの身にふれたる可しとて、我れに抱かるゝを。

（1）デーヴ・ダールは學名 Pinus deodar といふ松杉科の木なり。いま假りに「松」とす。

（2）雪山（ツシャーラードリ）はヒマーラヤ山の異名なり。

一一四

「みはり時ながき夜はなど刹那かとばかりに約めらるべき、日も亦いかで常にほてり和やかなるべき。目をのゝける女よ、かく得がたき希ひをもてる我が心は、そなたとの別れの苛なきわびしさに曇くせられぬ。

一一五

「噫ちゞに思ひつゝ我が身をみづからぞ支ふる。されば幸女よ、そなたも亦いたくな懾れそ。誰にか恆に福いたり又つねに禍きたるべき、境涯は車のわぶちのめぐりに依りて下または上に行く。

一一六

「聖毘紐笈神(シャールンガ・パーニ)(1)が蛇の床より起つや、わが呪(はれ)(2)のをはり（とぞなる）。殘れる四月をそなた瞑目してすごせ。さてこそ我れとそなたは別れにいや增されしかず〳〵の身のねがひを、秋の月影まどかなる夜にえて樂しまむ」と。

（1）シャールンガ・パーニは「シーャルンガ（といふ弓）を手にせる」の意にして養護の神ビシュヌの異名なり。此の神はアーシャーダの十一日（六月二十三日）よりカールチカの十一日（十月二十六日）までアナンタ（無邊）といふ大蛇の上に眠るなり。

（2）一參照。

一一七

『なほも亦かれは言へり「かつて臥所にてそなた我がうなじに縋り寢つきて後になじかは（知らねど）音泣きつゝ目ざめたり。さていくたびも根問へるわれに『さがなき人よ、卿ある女を悅ばせるを、わらは夢に見つ』とそなた笑

をふくみて告げたりき。

一一八

「目をのゝける女よ、此のしるし(1)（いひ）やるに依りわが恙なきを知り、うはさによりて我れをな疑ひそ。なじか人は別れのうちに情は冷むといふ。されどそれは享くる樂しみなきゆゑに、希ひに執心いやまして愛著の積りとこそなれ(2)」と』

（1）　前の句（一一七）にて云ひたる事を。

（2）　その愛情は。

一一九

「甫めてのわかれゆゑに歎きいらなき汝の朋女を斯くなぐさめて濕婆神(トリ・ナヤナ(五六・3))の牛に峰ほりかへされし山(1)よりとく立ち歸りし汝は、しるしと共に（かの女の）恙なき消息もたらすその言の葉もて、あしたの素馨の花の如くもろき我が玉の緒をもつなぎ留むべし。

（1）　雲の朋女すなはち藥叉の妻。

（2）　雪山のカイラーサ峰。

一二〇

「和人よ、[1]われに懇しき此のことは[2]汝に諾はれけるにや、なんぢの沈重を否みゆゑと我れはゆめ思はざるなり。求められて默せりとても汝は沙燕に水をあたふ。[1]よき人にありては願ひある者に、ねがはれし事を果すこそいらへなれば。

（1）　雲によびかけて云ふ。

（2）　我がための使ひの役。

一二一

「雲よ、友の情けゆゑにかはたひとり離されしとて我れに思ひやり篤くしてか、（なんぢに）[1]ふさはしからぬ希ひにいそしめる躬にこの惠みを垂れて、[2]長雨時に麗しさいや添へられし爾はこのめる處をさまよへ。しかして汝にいなづまよりの[3]斯かる別れなありそ」。　（完）

（1）　五參照。

（2）　プラー・ヴリシュはヴルシャーッハ（雨季）の別名にして五月十六日より七月十五日までなり（八九3參照）。

（3）　藥叉とその妻の如き。

昭和十七年五月七日福岡東油山にて第三修正をはる。